

大賞

茨城県古河市

山中やまなか

俐弦りつ（小1）

によきによき

「じやがいもあげる。」

おんなのこはあひるさんにじやがいもをあげました。するとあひるさんはじやがいもをみずうみのなかへもっていつてうめました。によきによきとたくさんじやがいもがそこからできました。みんなよろこんでみんなでたべました。

「おはなもうめてみよう。」

あひるさんはこんどはおはなをうめました。によきによきとおはながたくさんさきました。みずうみがきれいなピンくいろになりました。「ものじゅーすみたいだね。」

とみんなよろこびました。それをのんだあひるさんはねがぴんくになりました。「ふらみんごになつちやつたあ。」



準大賞

茨城県古河市

渡邊

千優（小4）

おひな様のために

あるお屋敷の押入の中、たくさんの人形が飾られる日を待ち遠しく過ごしていたある日、何とこの押入に人形の大敵である虫が現れました。衣装などを食べてしまう虫です。

「何としてでもおひな様を守るのだ！」

二人の侍が、満を持して出ていきました。

見事な刀裁きで次々と虫を追いやりました。「私の十二単をまもつてくださいありがとうございました。ございます。あなた方の端午の節句ももうすぐですね。」

おひな様がにこやかに笑いました。

この二人の侍のおかげでおひな様は無事桃の節句を迎えることができました。

この話は、人形中で代々語り継がれていくことでしょう。



入選

愛媛県松山市

若狭

早（小2）

春をおとどけ

春一番がふいたら、どこもかしこもぽかぽかい氣もち。ぼくは風の子、はるいち。妹といっしょに、日本の南から北まで春をおとどけしている。

「ふう。ちょっと休もうか。」

「そうだね。ちょうど半分まで来たかな？」
ぼくたちはいすみのそばで、ちょっと休けい。花のにおいにかこまれ、のんびりしていると、あひるさんがあいさつに来てくれた。
「はるいちさん、ながたびおつかれさまです。今年も元気な風をありがとうございます。」「どういたしまして。よかつたら、いつしょに休けいしませんか。」

妹におせんべいを出してもらつて、みんなで分ける。風にとばされないよう、気をつけて。



入選

茨城県古河市

高松

歩花

(中2)

僕の色



どれだけ探しても何も無いし、誰もいない。それに、どこまでも続いているように見えて端がある。そんな不思議な世界に突然僕は生まれた。この世界はいつまで眠っているんだろう、なんて待ちくたびれていたとき、そこに君は現れた。雪のように白い肌に真っ暗な髪。「君は誰？　どこから来たの？」話しかけても、君は笑顔のまま動かない。その場を離れようとしたとき、急に世界が色付いて見えた。いや、本当に色付いた。先程まで君が着ていた白いワンピースはやさしい桃色に染まった。気づけば、色とりどりの無数の薔薇が咲き誇り、始めの真っ白な世界からは想像できない美しい光景が広がっていた。いつか僕のこの羽にも、色がつくだろうか。

入選

茨城県古河市

初見

侑亮

(中2)

またね

ぼくのこころは、いつもまっくろ。おかあさんがせんえんさつをにまいつくえにおいていつてごかいおひさまにおはようといつてもかえってこなかつた。そんなことがいつもづいていて、えがおのやりかたがね、わからなくなつちやつたんだ。でも、まっくらなおそらにまたねつてするとたのしいおにわでゆきちゃんとあそんでるんだ。あひるさんもきてたのしくなつて、そうするとね、こころがあかるいいろになつてきてえがおのやりかたをおもいだしたんだ。でも、いかなくちやつてときがくるとみんなにまたねつてして、あかるいおひさまにおはようつていうんだ。またえがおのやりかたがわからなくなつちやうまえにまつくらなおそらにいうんだ。またね。



入選

茨城県古河市 青木 蒼弥（中1）
あおき そうや

背を預けて刃を抜く

夜風に揺れる青の衣で、ふたりの剣士は並び立つ。言葉を交わさず、その歩みが雪の道さえ静めてく。背に預け合う覚悟だけが、夜の気配を断ち切つた。「この先に何があろうとも。」短く言葉を交わした。風が鳴り止む一瞬の中、剣が閃き、影が崩れる。音もなく消えた敵に、目もくれずに進み出した。語ることなく背負うものを、ただ、胸の奥に沈めた。月が照らす白い足跡。闇に溶けても確かに残る。沈黙すら、信じる強さがふたりに宿つていた。何のためか、誰のためか。言葉はもういらなかつた。剣の重さを知つていれば、それだけで足りていた。遠くに灯る朝の気配に歩みを止めず、顔も上げず。語らずとも通じる想いを、静かな背中に映していた。



入選

茨城県古河市 沼田 唯愛（小3）

ガードのひみつのつばさ

ぼくは、ガードガード川にすむアヒルのリーダー
ガード。ガードガード川は、ふつうの川じゃない。
水はきらめき、風はささやき、夜になると月
の光が川の底までとどく。ここには、人に見
えないアヒルのまほうが流れている。ある日
いつもパンをくれる人間の子どもたちがやつ
てきた。二人は、ただの人間じやない。心の
光を持つていてる子ども。ぼくは、決心した。
ひみつの池へ二人をつれて行くつて。ぼくは、
羽を広げ、まほうの光を出した。ひみつを分
かち合える心を持った人にしか見えない光。
その光を進むと、花のトンネルをぬけ、ひみ
つの池へ向かう。小さな羽の赤ちゃんたちが
うかぶ水面には、空の色と星のきらめきがう
つる。水中には、虹色の魚が泳いでいた。



ブーム

茨城県坂東市

北城きたしろ

蒼真そうま（中2）



「えいつ！」「やあつ！」と怒号が響く。二尺ほどある刀を振り回し、悪人を成敗するのである。令和でいうところの警察のお役目に近い。盜人や罪人がうろつく夜に煌々と光る松明と共に、己の目も光らせる。ほら、また刀を抜いたようだ。勢い余つて、松明も手からすっぽ抜けた。「おい！ 松明、落ちたぞ。」「うわ！ やつちやつた！ しかも消えてるし……。」「LED壊れたんじやね？」「やば！ っていうか、口調戻ってるよ。」「しようがないって、それ高かつたんでしょう？」「はあ。」驚いただろう？ 時は四千XX年、令和に昭和ブームがあつたように、今は江戸ブームが日本を席巻中、まあ、令和の君じや想像もつかない先のことだろうけどね。

入選

茨城県古河市 小島 利緒(こじま りお) (小1)

そらのさかな

おんのことおとこのこがかわであひるにパンをあげていました。するとどこからか「ぼくもたべたいな」ときこえできます。ふたりはびっくりしてかおをみあわせました。「どこからこえがするんだろう」ふたりがうえをみあげると、そこにさかなのかたちをしたくもがうかんでいます。「ぼくにもちょうだい」とくものさかながいいました。「みんなでいつしょにたべよう」とふたりはそのくもにちかづいてパンをわけてあげました。

「ありがとう。おれいにぼくのせなかにのりなよ」くものさかなはふたりをせなかにのせてそらたかくのぼつていきました。たくさんのくものさかなたちとあひるとふたりは、みんなでたのしくそらをとびました。



入選

茨城県古河市

佐藤さとう

美知佳みちか（小6）

憧れの人

僕には憧れの人がいる。その人は常に冷静で、周囲に目を配ることができる。そして何より強く、火を自由に操る達人だ。

僕は、彼のようになりたくて、毎日鍛錬を欠かさなかつた。彼もそんな僕に色々教えてくれた。そして、ついに僕も火を操ることに成功した。僕は、彼に喜びを報告しようとしたが見つからず、二度と会うことはなかつた。

やがて、私をしたう弟子ができた。素直に助言を聞いて成長する弟子は、かわいいが脅威でもあつた。弟子が火を操れるようになつた時、私は嬉しく思いつつも、その場から去りたくなつた。でも、私は憧れの人とは違う。もっと強くなる決意をして、残ることにした。たとえそれが辛い道であろうとも。



入選

茨城県古河市 中村 理世（小5）

アヒルのおくりもの

「ぼくの大好きな場所を見に行こう。」

あひるくんに声をかけられた妹とぼくは、わくわくしながらついて行つた。着いたのは、森のおくの大きなほら穴。入り口が光つている。入つてみると、穴の中は、虹色の世界だつた。七色に輝くたきも流れている。水の中に手を入れるとみるみるにじ色の手になつて心がおだやかになつていく。このどうくつはやさしさのどうくつだ。この水でみんながやさしくなれたら、争いはなくなる。たくさんの人気がきずついているのを見てあひるさんも悲しく思つていたのだと思う。ぼくは妹と同じ色の水をどんどん運んだ。地球から争いが消えていく。そして、みんなが平和になつていいく。あひるさんが言つたとおりに。



入選

茨城県古河市

松崎まつざき

澪みお（小2）

一まいのビスケット

アヒルになつてしまつた四しまい。一わのアヒルは、ともだちにうそをついてきずつけた。一わのアヒルは、ともだちのわるぐちをいつてきずつけた。一わのアヒルは、ともだちをからかつてきずつけた。一わのアヒルは、こまつてているともだちをたすげずにそのままにした。アヒルたちが人げんにもどるには、おんなのこからのビスケットをもらうしかない。でもビスケットは一まいだけ。おんなのこのとなりには、おなかをすかせたおとこのこが一人。アヒルたちはかんがえた。アヒルたちは、ビスケットをもらわなかつた。人げんにもどれなかつたアヒルたち。うれしそうなおとこのこ。アヒルたちのやさしさをかみさまはみているだろうか。



入選

茨城県古河市 佐々木 咲奈（中1）

光が差す場所で

「ドックン…。ドックン…。」ママから伝わる心地良いこのリズム。私がもつと小さかつた頃、このお部屋はとつても優しいゆりかごのようだつた。でも、今の私にはこのお部屋がちょっとぴり居心地が悪くなつてきた。すると、遠くの方で一筋の光が差し込んできた。私は光の先にある泉のほとりで、ある女の子に出会つた。

「ねえ、あひるさん。今日は一人でここに來たの。ママが入院しちやつたの。だつて、もうすぐお姉ちゃんになるんだもん。私もあひるさんたちみたいな4人家族になるのよ。」その様子を見た未来の私は、心が踊つた。

「もういいかい？」光の出口まで、あと少し。



入選

茨城県古河市 青木 優結(あおき ゆうけつ) (中2)

アヒルの日記 450日目



今日いつものように池に遊びに来たら、人間の男の子と女の子がいました。僕はその子達仲良くしたいと思い、落ちていたポテトチップスをあげました。人間の男の子と女の子は何か発していたけれど、人間語がわからない僕達は「喜んでくれたのかな…」と思い、男の子の方へと近づきました。人間の男の子と女の子は「コバン」？と何回も連呼していました。僕の方を指さして「コバン！コバン！」と言っていたので僕の名前を考えてくれたのだと思います。今日で名前をつけられたのは372回目です。今回はコバンか…結構かつこいいと思いました。僕がコバンという名前で居続けられるのは何日なのでしょう。最高5日続いた名前は「ホワイトン」でした。

入選

茨城県古河市

渡邊

志穂（小1）

まほうのビスケット

「いつか人間になつておしゃれしてみたい
なあ！」あひるのこどもたちはみずうみから
人間のようすをながめゆめみていました。

あるひおひさまからふつてきたビスケット
をたべると人間になることができました。

かわいいくつをはいたあし、りぼんのすて
きなわんぴーすをきて、あいすくりーむのお
いしさにかんどうしました。

しばらくすると、みずうみのせいかつがこ
いしくなり、おかあさんやおとうさんにつ
たりなりなみだをながしました。

すると、たちまちあひるのすがたにもどり
おとうさんおかあさんにあえました。

にんげんもすごくたのしかつたけれどおと
うさんとおかあさんもいっしょがいちばん！



入選

茨城県古河市

角矢

悠莉

(小1)

おさむらいさんがふたり

おさむらいさんがふたり
りゅうぐうじょうにむかう

ふりんせすにあいにりゅうぐうじょうにいく
はやくあいたい

てきがいた

ひとりのおさむらいさんがけんをぬこうと
したそのとき

「ちょっとまって」

もうひとりのおさむらいさんがとめた
「どうしたの?」

「ふりんせすへのふれぜんとわされた」

「それはたいへんだ」

おさむらいさんはふたり

もとのみちをもどることにした



入選

茨城県古河市 早津 大和（小6）

叶えるにしても

我名は金剛力士。阿形と吽形である。寺院の入口で仏教、悪靈の侵入を防ぎ、仏教全体の守護が役目。民からお仁王様と呼ばれる。

今宵の我々は農民の三郎太たつての願い「隣村の敵が襲つて来ませぬように」を叶える為、姿を変え、敵となる隣村の本陣へと乗り込みこうして参じてみた。が、ちょっと待て。よく見れば毎夜、闇に紛れ現れては「戦のなき世の中に早くなりますように」と祈る伝蔵さむらいだいしょうが侍大将たかしやうとしているではないか。三郎太の願いは容易いが、伝蔵の祈こそ全ての民の願いそのままでないか。さて、我々が今すべき事は、このまま去り本来の姿で黙つて睨みを利かせて見守るべきか。それとも全ての衆生しゆじょうに済度さいどを施すべきか。はてさて――



茨城県古河市

上竹

こうた

入選 悪靈退治

悪靈退治に出かけた兄弟は、聞こえてきた声の主に戸惑っていた。兄に止められ、弟はぬきかけた刀を握つたまま声の方を見た。

あやしい黒い影を見つけた二人が斬りかからうとしたその時、「お助け下さい」と声を上げたのは悪靈ではなく山のよう大きな熊だったのだ。熊は、山の食糧不足のため、こつそり人里に現れては、食べ物を探していた。人を怖がらせてはいけないと見つからぬないようにしていったが、その大きな体に驚いた人々が悪靈と勘違いして騒いだのだった。

「私は人をおそいません。ただ少しだけ食べ物を分けてもらいたかったのです。」「そうだったのか。」兄弟は、人と熊の共生について考えながらいったん家路についた。

